
エンジェル

Mr.J

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェル

【Nコード】

N1757D

【作者名】

Mr.J

【あらすじ】

天使ルシファアは世界各地で人間を食う悪魔を殲滅すべく、旅をしている。悪魔の親友と共に・・・

最期の晩餐（前書き）

基本一話完結型なのですっごい長いです。

なので適度に分割して読んでくださいm（――）m

続きがわかりやすいように、各箇所マークを設けています。
それではエンジェルをお楽しみください。

最期の晩餐

「ルシファー、いつまで飲んでるの？」

「うつせー。」

暗く、雰囲気の良い酒場で、若い男が2人、カウンターを向いていた。

後ろから、ジャズの生演奏が聞こえてくる。

「早く行くよ。」

ほら、この書類見てよ。

ミカエルの親っさんカンカンだよ。」

黒い服を着た男が紙をカウンターに滑らせた。

紙はもう3時間酒を飲んでいる男の前で止まる。

「はぁ・・・何々？」

裏道に悪魔が12匹い？

「たたく、どうして人間ってのはこんな陰気臭い場所に逃げ込むんだ？」

正規の道をどう歩いてりゃあ、カラまれることもねえの二よ。」

煤か何かが付いて汚れている白いコートを着た男は頭を抱えた。

「どうして、裏道に人間が行くなんてわかるんだ？」

「んあ？」

んなもの簡単だ。

裏道に人間の魂を喰う悪魔が12匹も溜まってるってこたあ

そこがエサ場・・・少なくとも、その場所が人喰いに向いているか

らだろ？」

「なるほど、ダテに天使やってないんだね。」

黒い服を着た男はニヤニヤ笑った。

白いコートを着た男・・・ルシファーはカウンターの上に紙幣を置いて立ち上がった。

「行くぞサタン、とっとと仕事終らせよおや！」

「はいはい。」

2人の男は酒場から出て行った。

「お花はいりませんか？

ベルサイユ宮殿に咲いているチューリップです。

球根もあります。」

薄暗い町の一角で小さな花屋は今日の目玉を売っていた。

今年で15歳になる没落貴族の娘は、形見に持っていたベルサイユ宮殿の最後のチューリップを売っていた。

両親は昼夜問わずに働いている。

8歳になる妹を働かせるわけにはいかない。

このチューリップが相場どうりの値段で売れば、あと5年は暮らしていける。

「ステラ、おはよう。」

一人の貴族の青年が小さな花屋の看板娘に声をかけた。

「おはようございます。フューリッヒさん。」

少女は笑顔であいさつした。

「この球根、ひとつ買っよう。」

「あ、ありがとうございます。」

この青年は、若くして父親をさきの戦争で亡くしており、没落必須とさえ云われたにもかかわらず、家の名誉を汚さず、かつ発展させたのだ。

有り余る貴族の富は社会へ貢献するためにある。

しかし、青年は富の一部を今気にかけている女性のために使った。

もちろん、この行為を誰が批判するだろうか？

微笑ましい少年少女の恋路だ。

誰も邪魔などしないし、咎めもしない。

「これで・・・しばらくは生活も安定します。」

ステラは笑顔で青年に云った。

青年もその笑顔が見れて満足だ。

この時代のチューリップの球根ひとつあれば大きな屋敷が建つ。

「それではこの球根は、帰ってさっそく土に埋めようか。」

紅い花が咲いたら・・・いや、わすれてくれていいよ。」

「はい？」

「わすれてくれ。」

青年はコツンッと指で少女の額をつついた。

もうお分かりかと思うが、少女は青年の想いにまったく気づいていない。

否、気づけないのだ。

「それじゃあ。」

青年は乗ってきた馬車に乗り込んだ。

「ありがとうございます。」

少女が深々とお辞儀をした。

馬車は若い二人を遠ざけるように出発した。

「ふふふ・・・。」

青年は不適な笑みを浮かべると、球根を握りつぶした。

□ ■ □ □ ■

「お父様、お母様、おやすみなさい。」

「おやすみ。」

「おやすみなさい、今日はご苦労様。」

ステラは両親にあいさつしてから、自分の部屋へと戻っていった。質素なベッドに白いシーツがかけてある。

布団に身を潜らせて、瞳を閉じた。

突然、窓がガタガタと鳴り出した。

今日は風が強いのだろうか？

そう思つて、無理やり寝ようとした。

しかし、ガタガタと窓ガラスは震えている。

少女はベッドにヒザをついて窓を開けた。

しかし、窓の向こうから風は入り込んでこない。

そう思つた瞬間、漆黒の外から嫌な風が入り込んできた。

風はステラの身体を通り抜けて行った。

背筋が凍りつくのを感じて慌てて窓を閉めた。

そして、飛びつくように布団へと非難し、眠りについた。

朝起きて、ステラは頭痛がしているせいか寝起きが悪かった。

昨晚の夢は最低だった。

漆黒の世界で悲鳴と肉の切れる音だけがする夢。

夢の最後は自分の名前を叫ぶ断末魔の響きだった。

昨日の気持ちの悪い風のせいだろうか？

そんなことを考えながらステラは階段を降りる。

木製の質素な扉を開けてダイニングルームへ足を運んだ。

誰もいない。

朝もやが部屋を幻想的に飾り付けている。

いつものことだった。

ステラが朝食を作り終えた後に父親が慌しく部屋から降りてくる。

母親はすでに起きているハズだ。

庭で洗濯物を洗っているだろう。

妹がお昼前に起きてきて部屋の掃除をする。

いつもとかわらない朝……のはずだった。

すでに朝食を作り終えている。
庭に出て母親の姿はない。
おかしい。

そう思うだけで不安になってきた。
そんなことを考えていて思い出すのは昨晚の夢。
ステラは両親の寝室へ向かった。

○
○

三日後のことだった。

ステラは8歳になる妹マリンと二人で人々の前に立っていた。
その目先には二つの棺おけ。

マリンはステラの腕の中で泣きじゃくる。

「マアマア~~~~!! マアマア~~~~!!」

小さな女の子の悲惨な叫びは、その場にいわせる全ての人の心を
締め付けた。

マジメな花屋の看板娘に働き者の父、いつも希望を見出す母。

近所親戚からの評判はよかった。

その評価こそが、没落してもなお生活できたこの一族の強みだった。

「どうしてあんないい人たちが？」

「世の中とは皮肉なもんだ。」

人々がそんなことを口に出す。

良い人は早くに死ぬ。

そんな言葉が脳裏に浮かんでしまう。

一人、ステラは泣きたいのをこらえて孤独と戦っていた。
自分が泣いたら一家の示しがない。

没落後も学んだ帝王学の教えにそって、彼女は自分を押し殺した。

ほどなくして葬儀は終了した。

皆、墓地から三々五々に散っていく。

「……………」

2人の姉妹はしばらく墓地を見つめていた。

「帰ろう。」

沈黙の中、ステラが口火を切った。

マリンがうなずくのを確認して、ステラは妹を家路へ誘導した。

「今日は…………何が食べたい？」

ステラが優しい口調で話しかけた。

聞いてはみたが、答はわかっている。

「…………すばげちいー。」

マリンはミートスパゲッティーが大好物なのだ。

「はい。」

無理に作った笑顔で返事をする。

家の前まで帰ってきて、ステラは足を止めた。

中で物音がする。

両親が死んでしまった今、この家には誰も居ないはずだ。
なにより怪しいのは、家の錠が外れていることだ。

「……………」

意を決してステラは中へ飛び込んだ。

手には小刀を持っている。

「誰ですか！！！？」

ステラは銀の刃を前に向けた。

中には、男が二人立っていた。

しかも、黒い服の白い長紙の男は勝手に調理している。

「あ、おかえりなさい。」

お腹空いているでしょう？

ミートスパゲッティー作っておきましたよ。」

黒い服の男が笑顔で云った。

「……………はっ、だ・誰ですか！！！？」

しばらく呆気にとられていたステラは気を持ち直して叫んだ。

「天使。」「と悪魔でゝす。」

マリンは笑顔でパスタにかぶりついている。

それを黒い服の男はテーブルにヒジについて、笑顔で見ている。

「おいしいかい？」

「うん！」

「それはよかった。」

男は笑って答える。

ステラはそれをジッと観察的に見ている。

鋭い目つきにすら幼さが残る。

確かに、この男の作ったパスタはうまかった。

しかし、どうも信用できない部分が多すぎる。

「あなた達は……………誰なんですか…………？」

「だから、天使と悪魔。」

さつきからステラと汚れた白いコートを着た男と、同じ会話を繰り返している。

悪魔と悪魔なら、まだ信用できる。

「ルシファー、イジワルしてないで話なよ。」

ボクは規定でしゃべれないんだからさ。」

「知るかよんなクソな規定。」

この二人の会話はまったく読めない。

「何なんですか？一体……。」

「わーったよ、説明するよ……ったく。」

白いコートの男、ルシファーは紙切れを取り出した。

「この悪魔、見覚えあるだろ？」

「ルーシーファー？説明になってない。」

もういい、ボクが説明する。

あのねステラちゃん、ボク達はこの周辺に陣をはっている悪魔の親玉を探してるんだ。」

「悪魔の親玉？」

「そう、それで「おまえが説明するのかよ、規則もへったくれも」うつせーだまつてろ「はい……」それでね、その悪魔の親玉がここに居たことがわかったんだよ。」

何か覚えてないかい？」

「……もしかして、私の両親はその悪魔に……？」

「んー、どうだろう。」

通りすがりの切り裂き魔かもしれない。

でも、ボク達はその切り裂き魔が、その悪魔だと睨んでいる。

それで？何か思い出さない？」

「……。」

ステラは重い口を閉ざしたままだった。

それは、恐怖からではない。

この2人の男を、信用していいのかどうか……それが、彼女の

口の錠となっている。

しかし、黙っていても仕方がない。
そう判断した。

「実は……。」

▲▼▲▼

翌朝、3人はステラの部屋に居た

マリンはまだ眠っている。

「ここから風が流れ込んできたの？」

サタンは窓の付近を調べる。

当然、何もわからない。

「はい、急に変な……こう、なんていうか……まわり付いてくるような、ベッタリした風が……。」

「ふむ……。」

「デッドウィンドウ……。」

「だね。」

ボクも何度か吹かせたことがある……アレは人食いになれた悪魔じゃなくちゃ、悪魔自身にも気持ちのいいものじゃない。」

「あの、デッドウィンドウって？」

「デッドウィンドウ……別名はく悪魔のゲップ、爆笑だな。」

デッドウィンドウが吹いたってことは、少なくとも悪魔が居たってことだ。」

サタンは窓から見える景色を眺めた。

2階の窓から風が入ってきたということは、この窓と直線状に結ばれたどこかに悪魔がいたということだからだ。

「……。」

サタンがある一箇所を見た。

そして、顔がにやけた。

「ルシファア、今回は早く仕事が終わりそうだ。」

「ん？」

「ホラあそこ。」

サタンが指差す方向。

そこには大きな屋敷があった。

「狙ってた場所がこの窓の正面ある。」

「なるほど。」

ステラもその屋敷を見た。

「あのお屋敷は……確か、フェーリツヒ邸……。」

「フェーリツヒ……確か、さきの戦争で当主が戦死したっていう……。」

「なるほど、悪魔が巢作りつるにはピッタリだな。」

「近くまで来るとさすがにデカイなあ……。」

ルシファアは巨大な鉄城門の前で空を見上げた。

それほどに屋敷はでかつた。

サタンがインターホンを押す。

しかし、返事はない。

「やれやれ……全滅か？」

ルシファアが門を蹴り飛ばした。

門は呆気なく吹き飛ぶ。

「ステラちゃんはこの間に居ていいよ。」

「私も行きます。」

「離れるなよ？」

3人は巨大な屋敷へと入った。

屋敷の中は死体と血の水溜りで満たされていた。

「ひっ。」

ステラがとつさにサタンの後ろに隠れた。

「やらかしてくれたな……。」

ルシファーが先頭に立って進んだ。

「これじゃあ本当に全滅かもね。」

「ああ……こりゃあ2、3日前なんてもんじゃない。

見ろよ、コイツはもう白骨化しかかてる。

多分、襲われたのは数ヶ月前だ。」

「そんな……わけ、ないです。」

ステラが言い切った。

「それはどうして？」

「だって……4日前に……この当主様が、球根を買って
いってくれましたから。」

コツコツと静かな廊下を歩く音がした。

現れたのはフェーリッヒ伯爵だ。

「おや、これはこれは、ステラ嬢。

よくおいでくださいました。」

フェーリッヒが紳士的にお辞儀をする。

「フェーリッヒさん……これは……。」

「ああ、気の毒な事です……。」

ステラが歩み寄ろうとするのをサタンが静止した。

「え？」

「あれは……あなたの知るフェーリッヒ伯爵ではありません。」

「サタン、ここ出るぞ。」

「おやあゝ？そこにいらつしやるのはもしかして裏切りモノのサタン君と、かの有名な隻翼の天使さんではありませんか？」

「姿を現せよく心巣くい>！」

ルシファアの挑発に乗ってフェーリツヒの身体を突き破って巨大な黒い翼を持った悪魔が現れた。

「な、なんです・・・か？・・・あれ・・・。」

「アイツは心巣くいという悪魔です。」

人の心に入り込んで、時間はかかりますが、やがて自我を押しつぶして身体をのつとる悪魔ですよ。

おそらく、あなたが出会ったというフェーリツヒ伯爵が、最期の瞬間だったのでしょう。」

「サタン！！こいつは俺だけで十分だ！！

先に親玉の方燻りだして来い！！！」

『ほう・・・この私をキサマだけで倒せると？』

「悪いな・・・。テメエ一匹ぐらい余裕だ。」

『くたばれえい！！！！！！！！』

大きな腕が弾丸のように拳を放つ。

それを、ルシファアは軽く避けた。

「でかいほうが斬りやすい！！！」

ルシファアはコートに隠してあった剣を取り出した。

そして、今放たれた拳を斬る。

斬られた拳は蒸気を上げた。

『ぬう・・・おのれえ！！』

悪魔は口を大きく開き、光の弾を放った

「ちい！面倒な能力もってやがる！」

ルシファアは剣で光の弾を受け止めた。

受け止めた衝撃で後ろに吹き飛んだ。

『ふはははは！！片腕を失った貴様に、私が劣るとでも？』

「そうだな・・・俺以下の以下のカス以下だ！」

『・・・次で、その息の根を止めてくれるわ!!!』

悪魔が両腕を前に突き出した。

『おおおおおおお!!!!!!!!!』

口からはなつた光の玉とは比べ物にならない大きな弾を作り出す。

「チカラつてのはな・・・強いコトが弱点なんだよ・・・。」

ルシファーは剣の腹の部分のギミックを変えた。



「ハアハアハア・・・ど、どこまで走るんですか？」

ステラは息切れして立ち止まった。

「君の家の裏道です。」

そこに親玉が居ます。

つてか、ここですね。」

「え？アイツが親玉なんじゃあ・・・。」

「残念ですが、あの程度の悪魔が親玉なわけありません。」

物陰から黒い物体がゴソゴソ動く。

「ここは戦場になりますが・・・まあ、家で一人で居るより安全でしょう。」

今頃アナタの家は悪魔の巣窟です。」

「え？・・・!!」

マリリン！」

「彼女なら・・・そこに・・・。」

サタンが物陰を指差した。

「マリリン？どうして・・・？」

「それはですね・・・彼女が、悪魔の親玉だからです。」
ステラは言葉を失った。

「どうして・・・わかったの？」

指差されてもなお出てこなかったマリンは、観念したのか物陰から姿を現した。

「簡単じゃあないですか、同室でご両親と就寝なさっていたアナタが、どうして生き残っているのですか？」

「それだけ？」

「それだけです。」

「な〜んだ・・・おまえ・・・。」

「おもしろくない奴。」

マリンの小さな身体は地に倒れた。

そして、その屍からあまりにも巨大な悪魔が現れた。

「そんな・・・うそ・・・。」

「ステラさん、下がっていてください。」

サタンが身構える。

同時に、3匹の悪魔が襲い掛かってきた。

サタンの両腕が長くなり、爪は鋭く伸びた。

回転しながら悪魔を3匹、深深と斬った。

両腕を胸の前でクロスさせ、思いつきり外側へ振るった。

そして、漆黒の翼が背中から生える。

『それがアナタの本当の姿？裏切り者サタン・・・。』

「ええ・・・。」

『なぜ、アナタが天使や人間の見方をするのかは知らないけど、邪魔をするなら容赦なく殺すね。』

「それは困りますね、まだ死ぬわけにはいかないので、返り討ちにさせていただきます。」

サタンは翼で地面を蹴るように飛んだ。

低空飛行で悪魔に近づく。

しかし、左右から悪魔が飛び出してきた。

「ちっ。」

地面に爪を突き立てて回転し、悪魔を蹴り飛ばす。

そのままの遠心力を利用して一方の悪魔に飛びつき、引き裂いた。

『死ね!!』

蹴り飛ばしたもう一方の悪魔が渾身の一撃で殴りかかってきた。

サタンは息を詰まらせたままレンガの壁にぶつかった。

「サタンさん!!!」

マリリン! やめて! おねがいだから!!」

「ステラさ……ん、アイツは……マリ……ンさんでもなん……でもない……」

マリリンさんは……アイツに殺され……て、いる……」

「そんな……」

『まあ人間いつかは死ぬんだから落ち込まないで?』

その代わり、ちゃんと安楽死させてあげるから。』

「どうして……どうして……どうしてアナタ達は人を殺すの!!!?」

どうしてマリリンを……お父様とお母様を……」

『泣かないで? 泣いても悲しみが増えるだけ。』

どうして殺すかですって?

そんなの簡単、生きるためよ。

あなた達だって、ブタやウシやウサギを食べるでしょう?

そして、アナタ達がする料理、それは私達でいう殺し方。

ほら、よく言うでしょう?

映画とかで相手を追い詰めた時に「どう料理してやるのか?」って。

』

ステラは涙を流したまま座り込んだ。

体中の力が抜けた。

「ひどい……ひどい……!」

『ひどくないわよお。』

だって、生きるためにくしかたなく>だもの。』

「悪魔に生きる資格などない!!」

サタンは叫びながら斬りかかった。

蹴り飛ばしてきた悪魔は真つ二つに斬れた。

『その言葉はアナタ自身を否定しているのよ?』

「ボクと貴様らを一緒にするな!!!!」

『同じじゃない。』

その黒い翼、獰猛な爪、赤い目

どれをとっても私達と同じ。』

「クッ。」

悪魔は手を突き出して波動を放った。

サタンはステラのところまで吹き飛ばされた。

悪魔が2人を押しつぶそうと巨大な拳を振りかざした。

『アナタは同じ、私達と同じなの。』

「違うなあ・・・心ってやつが・・・な。」

一筋の銀の閃光が腕を斬った。

斬られた手と腕の間からルスファアが落ちてきた。

『つつ・・・アリファネスはどうしたの?』

「ああ、アイツか?」

アイツさ、でっかい弾撃ってきたんで跳ね返したら呆気なく飲み込まれたぞ?」

『・・・・・・。』

「さあ・・・次はテメエの番だ。

さて・・・・・・どう料理してやるつか?>」

『追い詰めたつもり? 隻翼の天使。』

周りから、取り囲むように残りの悪魔が出てきた。

「決めたぜ・・・・」「千切り悪魔定食」だ。

いくぜ! サタン!!」

「『汝、我が契約を交わすものなり。

我が肉体は汝の身体となる。

我が血は汝と同じくその身体を流れる。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

最期の晩餐（後書き）

いかがだったでしょうか？
長かったですよね^^；

感想又は評価舞っています。

どうぞよろしくおねがいしますm
——（
m

悪魔の契約（前書き）

意外に前回より2000字少ないです^^

悪魔の契約

「嫌な夜だ・・・。」

ルシファアは星が見えない黒い空を見上げた。
周りはスモッグだ。

ロマンティックには程遠い。

「さあ・・・仕事だ。」

右腕に持った剣を肩にあてる。

目の前に何匹もの悪魔が現れた。

『るしふあー・・・。』

「しゃべるな、うつとうしい。」

道端に捨ててある葉巻をブーツで踏みつけた。

剣の切先が地を指す。

次の瞬間、銀の閃光は漆黒の空間にきらめいた。

○
○

「あゝあゝかつたり~~~~!!」

天国の自室でルシファアはベッドに飛び込んでそう叫んだ。
毎日毎日ザコい悪魔を狩る、そんな生活に飽き飽きしていた。

「まあそう云うな・・・おまえには皆感謝している。」

ルシファアの自室にあるガラス製の机に酒を置いて、ミカエルは胡坐をかいている。

「なあおっさんよお、悪魔なんて狩ってどうする？
どうも俺は人間ってのが気に食わない。」

「まあそう云うな、そんなことを云えば、

俺はおまえの部下のクシヤラボラスやベルゼブブのほうに食わ
ん。」

「ち……。」

「なあルシファー、おまえは俺なんかよりはるかに強い。
だからこそ、下界にわざわざ出向いてもらってる。

ここじゃあおまえのこと英雄とさえ思う者も居る。

あのクシヤラボラスなんかがおまえの下で働いているのは、そっ
うことだよ。」

「何が云いたいんだよ？」

「自分の仕事にホコリを持ててこつたよ。」

「ヘイヘイ、せいぜい精進しますよ。」

ルシファーは腕を頭の後ろで組んでベッドに転がり込んだ。

無地の天井を見上げて不満そうな表情になる。

それを見てミカエルはため息をついた。

今日は絶好の洗濯日和だった。

無駄にまぶしい日差しがルシファーの睡眠を妨げた。

「おう！ルシファー、居るか？」

まあ居るわなあ。」

ミカエルがルシファーをたたき起こす。

「なんだよ？」

「俺がここに来るのは仕事の話をするか酒を飲むかだ。」

「どっちだ？」

「仕事だ。」

「はあ……。」

予想どうりの反応にミカエルは微笑んだ。

「まあ、た弱いものイジメか？」

「勝てば皆弱者だ。」

おまえが勝つかぎりソレは弱いものイジメだよ。

しかし、今回ののはちとばかり手ごわいぞ。」

「ほほ。」

ルシファアはベッドの上で胡坐をかいた。

「んでえ？どうやバいんだ？」

上機嫌でルシファアは聞いた。

ミカエルは頼もしいのかうぬばねなのか、複雑な心境になる。

「コキユートスの住人だ。」

逃げ出したのがわかってからすでに20ヶ月たっている。」

「コキユートスから！！！！？」

おいおいオッサン、それはやばくないか？」

「どうした？怖気づいたのか？」

「違う違うそつぢゃない、コキユートスの警備状況について云ってるんだよ。」

こいつがコキユートスの住人だとすりゃあ逃げるのに絶対2〜3匹は絡んでくる。」

「さっしがいいな、実はもう一匹、意味不明な悪魔も確認されている。」

「あ？」

「なんでも、こいつは悪魔に名は知られているが、姿は見られたコトがないらしい。」

「そいつもコキユートスの住人か？」

「さあな、どっちにせよ、ハデスの兄ちゃんはカンカンだ。」

ケルベロスのケツを3回焼き払わん勢いだそうだ。」

「オーケイ！」

ルシファアは飛び上がると、大きな翼を広げた。

「行つてくらあ。」



「はぁ・・・サムい・・・。」

降りた場所は極寒だ。

コキユートスの寒さよりはマシといえど、あまりにも寒い。

「あゝ？マイナス28度？」

バナナも凍りそうな寒さだ。

身を震わせながら近くの宿に入った。

「らっしやい。」

「部屋を一晚とつてくれ。」

「あいよ。」

ルームキーを受け取ってルシファーは部屋に向かった。

部屋にはレンガの暖炉が備わっていた。

ここの宿屋はちよつと豪華だ。

「はぁゝ生き返る・・・。」

暖炉の火に身を寄せながら表情がゆるくなった。

暖炉の炎が揺らぐ。

「・・・クシヤラボラスか？」

目を閉じたままルシファーは云った。

「あゝあ、ばれちゃった。」

炎が一瞬強くなった。

そしてそこから炎が形を作りながら飛び出してきた。
部屋は一瞬明るくともされた。

飛び出してきた炎は若い青年の姿を作った。

「アニキ、こんなとこで何してたの？」

「それはコツチのセリフだよ。」

おまえインドに居なかったか？」

「いや、シヴァのダンナにちよつと鍛錬入れてもらつてさ。」

さつすがアニキだよ。顔が広い！

次はホルスのにーちゃんかラーのジーサンがいいなあ……。」「

「アホ拔かせ。」

エジプトは今はやめとけ。

つてかちつたあ自分で技を磨けよ。

なんだ？しまいにやあフレイにでも声かけろつてか？」

「おお！是非頼むよ！」

「……。」

ミカエルがクシャラボラスのことが気に食わないと云った。

何故かそれが脳裏を走る。

「ところでよ、おまえここにどんくらい居るよ？」

「えゝもしかしてアレ？コキュートスから出てきた悪魔の話？」

「そーそー、ソレで？何か知ってるか？」

「んゝ……最近さあ、悪魔同士で殺り合ってるらしいよ？」

「悪魔同士で？」

「うん、まあ僕が知ってるのはこのくらいかな。じゃ！天国に帰るよ！」

「寝る前に歯磨けよゝ？」

クシャラボラスは炎に飛び込んだ。

出てきた時と同じように一瞬炎が強くなって部屋が照らされる。

「悪魔どうして……ねえ……。」「



昼過ぎに目が覚めた。

悪魔の探索をするなら夕方が好ましい。

しかし、ルシファーは昼過ぎから探索を始めた。

この町では人が行方不明になったりはしていないらしい。

しかし、近場でいくつも殺人があつたそうだ。

そして、そのほとんどが迷宮入りだ。

ルシファーは殺人があつた家を地図にしるしていった。

そうしてそれを線で囲む。

その戦で囲まれたエリアの中心部へ向かう。

「ビーンゴ。」

そこは裏どおりだった。

悪魔はこんなところを好む。

案の定、その痕跡は発見した。

何か鋭い凶器で壁がいくつも抉られていた。

しかし、その深さからして人間ではない。

「絶対悪魔だろ、コレ。」

キズに手を触れた瞬間、置くから物音がした。

「んだあ？」

ルシファーは息を殺して音がした場所へ向かった。

そこでは黒い大きな翼を持った悪魔の周りに氷の部位を持つ悪魔が何匹も集まっていた。

『見つけたぜえ……。』

『よくも同胞を……。』

「お前達は一体何人の人間を殺した？」

それに比べればキサマ達など……。』

『うるせえ！！人間なんかと同じにするんじゃない！！』

「そうだな・・・悪魔と人間は違う。」

黒い翼の悪魔は構えた。

その手には鋭い爪が伸びている。

『殺れ！！』

悪魔が一齐に飛び掛った。

しかし、飛び込んだ悪魔は一齐に肉片と化した。

人間の魂が悪魔に流れ込んでいく。

それは今さっき肉片と化した悪魔達が喰ってきた魂だ。

「魂喰らいか……。」

ルシファアは物陰からソレを見ていた。

大きな黒い翼の悪魔の羽が魂の数だけ大きくなった。

悪魔は魂で強化されていく。

しかし、ルシファアは信じがたい光景を見た。

悪魔が天に長い腕を翳した。

そしてそこから大量の魂が天に向かって放たれた。

そう、悪魔は取り込んでいた魂を全て開放したのだ。

小さくなっていく翼。

全ての魂を開放してもその翼は十分大きかった。

その光景は神秘的といっても過言ではなかった。

悪魔がこちらに気づいた。

「だれだ？」

ルシファアは物陰から出た。

翼と同時に右腕も吹き飛ばされた。
ルシファーは地面に叩きつけられる。
大量のホコリが煙のように舞う。

「ぐつつう……。」

悪魔は冷たい瞳でルシファーを見下ろした。
そしてそのままどこかへ飛び去った。

「ち……。」

目が覚めたのは夜中だった。

冷たい石の上で寝転がっている。

そうでなくともここは寒い。

服の上には大量のホコリがついている。

しかし、もっとも寒いのは右腕。

厳密には、右腕がついていた右肩だ。

ものの見事に右翼と右腕は切り払われていた。

「あんのヤロー……魂全部抜いてあのチカラかよ……。」

もう感覚はマヒしていて痛くはなかった。

「はあ……。」

宿を一日延長して泊めてもらった。

暖炉の前のソファで一息ついた。

なにやら寒い。

窓を見ると、マドガラスが割れていた。

何の因果なのだろうか？

割れたマドガラスの下にはつい8時間前まで自分のモノだった右腕と剣が落ちていた。

ルシファーは右腕を拾うと、暖炉に投げ込んだ。

右腕は勢いよく燃え上がった。

切り落とされた右翼は光の粒子になって消えたかローストされた手羽先になってどこかの食卓に並んでいるだろう。

「あゝー！！！冗談じゃねえぞ！！たくよお！！」

ソファに身を任せて顔を天井に向けた。

「ああ・・・眠い・・・。」

ルシファーはそのまま深い眠りについた。

しかし、眠っているながらもあることを考えていた。

それは、あの悪魔のことだ。

魂を天にささげるようなあの光景が、何度も瞼の裏で繰り返されていた。

翌朝、

ルシファーある根拠を元に地下墓地へと足を運んだ。

地下墓地への入り口に黒い羽が落ちている。

その扉を開けると冷たい冷機がルシファーを包み込んだ。



悪魔が階段を降りていく。

地下墓地はいくつかのフロアに分かれている。

悪魔は、その最下層へと向かった。

その最下層は別名コキュートスと呼ばれ、罪人の屍を放り込む場所だ。

悪魔がその最下層の扉を開いた。

そこにはあまりにも巨大な悪魔が横たわっていた。

それは多くの人間の魂を取り込んだことを意味する。

『おまえかあ！』

我が子達を根絶やしにせんと企む悪魔はあ！！』

「十大悪魔、ギルベルス・・・永遠に地獄の最下層で大人しくしていればよかったものを・・・。」

『ふん！キサマも同じ口だろう！』

何故？キサマの凍結が破られたあ？

十大悪魔、サタン！！！！』

「貴様ら出来損ないの悪魔を殲滅するためさ。」

サタンは爪を構えた。

ギルベルスは大きな身体を起した。

『いきがるなよお！小僧う！！』

ギルベルスが重い一撃を放った。

間一髪でサタンは回避した。

そしてその巨大な身体に爪を入れた。

しかし、悪魔の身体を引き裂くことなく表面を滑った。

（硬い！！）

『はっはあ！！どおしたあ！！？』

ギルベルスが横に腕を振るった。

「ぐっ！」

サタンは石造りの壁に激突した。

激突の衝撃で息が詰まった。

『終わりだあ！！！！』

不敵な笑みを作りながらギルベルスはサタンにトドメの一撃を放つ

た。

「そうは・・・いけない!!」

サタンは翼を思いつきり開いた。

その衝撃波でギルベルスを吹き飛ばす。

『ぬう・・・十大悪魔とよばれるだけあるということかぁ・・・。』

「次はこちらから行くぞ!!」

サタンは翼を左右に大きく開いた。

そしてその翼が黒く光る。

サタンは翼を羽ばたかせてギルベルスに向かって飛んだ。

低空飛行で間合いをつめて一気に上へ飛ぶ。

それと同時に翼の黒い光が全て右手に移った。

上から下へ向かって放たれた一撃で悪魔の肉を裂く。

『ぬぁぁぁ!!!!』

巨大な悪魔は傷口を押さえる。

『キサマアアア!!!!』

ギルベルスは瞳を大きく開いた。

「!!!!」

サタンは硬直した。

そして、すかさず重い一撃で叩きつけられた。

「あ・・・はぁ・・・!!!!」

サタンは体中に走る痛み of せいで動けなかった。

『死ねえええ!!!!!!』

「ふん。」

一人の男が二人の間合いに飛び込んだ。

巨大な悪魔の一撃を左腕の剣で押し払った。

「天・・・使？」

「ご名答。」

ルシファアは目線だけを後ろの悪魔に向けた。

『ぬうう・・・何故天使がここにい?』

「お前の手下が殺していった民家を地図の上で線で結び、その中心にある建造物で、悪魔が身を隠せそうな場所、しかも、昨日の手下が所持していた魂の量からして親玉は巨大。

ハデスでもない透明になるのは不可能、とすれば、巨大な悪魔が見つからないとすればどこかの建物内、運よくコキユートスなんてシヤレのきいた地下墓地がここにある。

ま、そういうことだ。

どこぞの変人のせいで飛べなかったから、来るのは大変だったがな。

「
チラリとルシファアは悪魔を見る。

『ふん！しかし、十大悪魔であるワシに勝てるかな？手負いの天使。

』
「称号なんざくだらねえ！
おい悪魔！」

ルシファアは後ろの悪魔に振り向いた。

「おまえ、よくも俺の右腕と右翼切り離してくれたな！

おかげで俺の右翼はどっかのマダムの手で手羽先ギョーザになれちまったじゃねえか！」

「何が・・・言いたい？」

「俺と契約しろ。

んで、俺の右腕と右翼になれ。」

悪魔は目を丸くした。

「おまえ、自分が何を言っているのかわかっているのか？」

「んなこと言ったってだなあ！

俺は右利きなんだよ！利き腕吹き飛ばされちゃあ何もできないんだよ！」

悪魔はルシファアの顔を見た。

ルシファアは笑っている。

悪魔はつい笑みをこぼした。

「利き腕に武器を持っているのが悪いんだよ。」

悪魔は立ち上がった。

「契約だ！！」

ルシファーを白と黒の翼が包む。

翼が広げられると、悪魔の右腕を持った堕天使が立っていた。

「さあ、ショータイムだ！」

「なまいきなあ……！！！！！！」

ギルベルスは腕を大きく振るった。

「おせえ！！」

ルシファールは高速で地面を低空飛行する。

一瞬で懷に飛び込んだ。

右手に持った剣を十字に振るった。

剣から放たれた光の波動が十字を描いてギルベルスに向かって飛んでいく。

「ぐあああああああ！！！！！！！！！！」

ギルベルスは断末魔を上げて散った。

「おいルシファー！お前何を考えている！！」

天国の門でミカエルが叫んだ。

門番から大至急来てほしいと云われ来てみればルシファーが悪魔をつれていたからだ。

「こいつは俺の身体の一部だ。

ほれ！右腕をコイツに斬られたんだよ。

その代償として、こいつは俺の下僕だ。」

「きさま！それで悪魔の契約をしたのか！！」

「んなもん建前だよ。」

悪魔の契約でないと一心同体になんねえだろ！

なんなら天使の契約でも作ってくれよ！」

「ぐっ……」

いいだろう、その悪魔がお前の右腕を切り落とした罪以外に……」

「あ！右翼も！」

「右腕と右翼を切り落とした以外に罪を犯していなければ認めてやる。」

この時、ミカエルは何かしらの罪があると過信していた。

しかし、後日でた報告では、罪はひとつも発見されなかった。

15年後

「なあルシファー。」

「んあ？」

ルシファーは天国の自室で武器の手入れをしていた。

「古い話なんだけどさあ。」

「おう。」

サタンは机にヒジをついた。

「どうして、あの時腕を斬ったボクを……」

「右腕ないと不便だからだ。」

「本当にそれだけ？」

「それだけ。」

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e

悪魔の契約（後書き）

ギルベルスなんて悪魔居ません^^

オリジナルキャラです^^

サタンとルシファーは同一視されることがあるので、

片方は悪魔片方は天使で、合体して墮天使ってことにしました。

我ながらナイスな発想！！（○）>ω・（）bイエーイ

感想評価、よろしくおねがいしますm（――）m

魔王サタン（地獄の決闘編前編）

「あゝゝゝ．．．．．」

サタンはさつきから嘆くかため息をつくか、どちらかしかなかった。

「あきらめろ。」

「うつさいなあ．．．．あゝゝゝ．．．．はあ．．．．」

ルシファアはサタンを無視して先を歩く。

「やっぱ今回はお留守番ってことで．．．．」

「だめ。」

「だって！！殺されるって！！絶対殺される！！！！」

「ちゃんと話は通してあるから大丈夫だ。」

「大体さあ！なんで神の所有物を天使が守るわけ！！？」

「神と天使つてのは単なる階級みたいなもんだ。」

神より強い天使だっているし、天使より強い神も居る。」

しかし、サタンはなおも抵抗する。

「ハデスの旦那は天使より強いだろ！！！！？」

オリュンポス十二神ぞ！！？」

「しらねーよ。」

「畏だ！！」

きつとこれはボクを殺すための畏だ！！！！」

「．．．．」

「っというわけで帰ります。」

サタンは180度方向を変えた。

ルシファアはサタンのクビ根っこをつかんだ。

ズルズルサタンを引きずりながら地獄へと向かう。

「いゝやゝだゝゝゝゝ、助けてゝゝゝ！！神よ！ボクに慈悲を！！！！！！」

「悪魔が何云ってやがる。」

ルシファアは呆れながら目的地へ足を進めた。
その間、サタンの不満の声が尽きることはなかった。

「地獄・ヘルズゲート」

「グルルル。」

地獄の門まで来たところで2人は足を止めた。
目の前に巨大な犬が立ち肌かえる。

門番・ケルベロス。

3つの頭を持つ番犬だ。

「あ．．．ども。」

サタンは軽く頭を下げた。

ケルベロスはずっとサタンをにらみつけている。

「おまえ、なんかあったの？」

「コキユートスから逃げるときに．．．ちょっと。」

「まっていた．．．。」

「ひ！」

サタンはすかさずルシファアの影に隠れた。

1人の男がケルベロスの下を通って歩いてくる。

オリュンポス十二神が一人、地獄の神ハデス。

「こつちだ。」

ハデスはサタンを視界に入れながら地獄へと招き入れた。

「つで？どこにあるんです？」

オーデイン殿から預かった永牢の石タルタロスは．．．。」

「最下層だ。」

「やっぱりか．．．遠いな。」

ハデスは黙々と地獄を進む。その後ろをルシファアが進み、そのすぐ後ろをサタンがコソコソついていく。

「．．．。」

「．．．。」

「~~~~~」
「なんとも気まずい空気が流れる。」



「ここだ。」

そこは地獄の最下層。

極寒の牢獄コキユートス。

以前、ここでサタンは凍結封印されていた。

「おまえよくこんな遠いところから逃げれたな。」

「いやあ・・・あはははは。」

サタンはちらりとハデスを見る。

その目はいつでもおまえを殺すと言っている。

「まったくだ。オーデイン殿からもっと早くタルタロスを預かって
いれば逃がすこともなかったのにな・・・。」

「~~~~~」

（無理だルシファアー！やっぱ帰る！！！）

（あ？今離れて地獄で迷子になったらおしまいだぞ？）

（ならないよ！一回ここ抜けてるんだから！！）

「ちなみに・・・。」

コソコソ話すふたりにハデスは割って入った。

「今仕事をほったらかして逃げたら・・・容赦はしない。」

「・・・。」

サタンはおとなしくなった。

「んで？タルタロスはどこに？」

ルシファアーはあたりを見渡す。

どこを見てもそれらしい物は見当たらない。

「どこかにはある。」

「・・・。」

「ところで。」

サタンは二人に向き直る。

「そのタルタロスを狙ってるのって誰？」

『そいつは俺さ!!』

地獄中に響く声がした。

その瞬間、突風が巻き起こり、三人は散り散りになった。

「いつつっ……。」

ルシファーは起き上がる。

一瞬の間に結構上の階まで吹き飛ばされていた。

「ありや転移魔法だな。」

ゆっくりと起き上がり身なりを整える。

「さて……。」

ルシファーは背筋を伸ばす。

「ここは……どこ？」

○ ○

「いつてえ……。」

サタンはゆっくりと起き上がる。

そこには見覚えがある。

「……最初のほうだな……。」

あたりを見渡せば幽閉された魂がフワフワ浮いている。

魂は何かを求めるかのようにチカチカ光っている。

「君わるいなあ……やっぱここ好きじゃないや。」

背後に視線を感じる。

「とりあえず、ルシファー探すかなあ……天使さまにやあわからんでしょ。」

ここの土地柄。」

背後からいきなり黒い犬のようなソレが襲い掛かってくる。

サタンは振り向きざまに爪で引き裂いた。

真つ二つに切断されたソレは空中で崩壊した。

「地獄片に殺られはしないだろうけどね。」

サタンはゆっくりと下層に向かって歩き出した。

しかし、その足はすぐに止まる。

「しぶとい……。」

「まあそういうなって……サタン。」

サタンの前に背丈は同じくらいの悪魔が現れた。

「まだ地獄片にまぎれてこんなところに？」

「居心地は悪くないぞ？サタン。」

毎日魂が喰えるんだからなあ……。

ま、味はよくないな。」

下で唇をなめながら言う。

「魂なんか喰わなくても悪魔は生きていけるんだよ。ベルフェゴール。」

「魂は強さだサタン。」

七本の指に数えられるおまえの魂……実に興味深い。

俺はグルメなんだ。」

「グルメがザンパンみたいな地獄の魂を食うのかよ。」

それに、＜七つの感情＞の味が知りたいなら自分を食え。」

「おとなしく喰われるサタン。俺はメンドイのは……嫌いなんだよ……！」

ベルフェゴールは地面を蹴って駆け出した。

一瞬で距離が縮まる。

ベルフェゴールは腰から太刀を取り出す。

「そいつは……ふ、うまかったか？蛇は？」

繰り出される一撃を後退して避ける。

「酒気を帯びた蛇がウマイわけないだろう？」

後退するサタンを追撃する。

追いつきながら太刀を縦に振るう。

太刀は雷を召喚し、雷撃がサタンを包む。

「うわぁ！」

『エレキローストにしてやる！！新しいだろう！？』

「まずそうだ。」

爪でまとわり着く雷撃を振り払う。

「ジパングってのはややこしいモンばっか作るな・・・！」

間髪をいれずにベルフェゴールが飛び掛ってくる。

刃を受け止め、刀ごと吹き飛ばす。

ベルフェゴールは空中で体制をととのえて着地する。

今度はサタンが切りかかる。

鋭い爪がカタナと接触し、火花を上げる。

『どうやら本気を出さなければ決着はつきそうにないな！』

ベルフェゴールは初めて後退し、刀を投げ捨てる。

そして、拜むように手を合わせた。

体中から紫のオーラが出る。

背中から巨大な黒い翼が生え、目は青から赤へ変色していく。

腕や足は細くなっていく。

ジャンパーだった服はダウンのコートになる。

「それが本気？さっきより迫力なくなったね。」

『おまえは本気を出さないのか？』

「生憎、使わないにこしたことはない立場になっちゃってね。」

サタンは身構える。

『そうか、なら死ね！！』

地面を蹴り飛ばして突っ込んでくる。

さっきとは比べ物にならない。

突き刺さっている刀を抜き取りながら一度も地面に触れることなく

サタンの懷まで飛んできた。

「うわ！」

とっさに振り払う。

そのチカラを流すように一旦ベルフェゴールは距離を置いた。
しかし、地面に着地すると同時に地面を蹴る。

飛び越えざまに斬りつける。

それを何回も何回も繰り返す。

斬る。

斬る。

斬る。

斬る。

何度もサタンを浅く斬っていく。

「ああ！うつつとうしい！」

『ふっ。』

ベルフェゴールはサタンの頭上で反転しながら雷撃を落とした。

「うわあああ！！」

サタンはヒザをついた。

『終わりだ！』

「ぐっ・・・くっ・・・！！」

間一髪で最期の一撃を避ける。

『しぶといな。』

ベルフェゴールは着地して静止する。

『少し削るか。』

ベルフェゴールは腕を上げた。

すると、さっきまで居なかった地獄片が現れた。

「どうやって・・・餌付けしたんだい？」

『友情が芽生えたんだよ。』

「それを悪魔が云うとヘドがでるね。」

サタンは強がりながらゆっくりと身体を起こす。

（コレ・・・きついな・・・）

ここが潮時？

やれやれ、せっかく地獄から逃げたのに最期は地獄か・・・。
（サタンは爪を立てる。）

「悪いけど、しつこいのがとりえなんで、よろしく。」
ベルフェゴールは腕を下ろす。

それと同時に地獄片が一気に襲い掛かってくる。
「はああああああああああああああああ！！！！！」

サタンは雄たけびを上げた。

サタンの身体の周りに黒い霧が渦巻く。

その霧にむかつて地獄片は飛び込んだ。

飛び込んですぐ、地獄片の哀れな断末魔が聞こえた。

霧が吹き飛ぶ。

『さあ・・・終わらせようか・・・』

『それが、おまえの姿か？サタン。』

ベルフェゴールは不適な笑みを浮かべた。

「ああ！！なんだよこいつら！！」

ルシファアは次々に襲ってくる地獄片に嫌気がさしていた。
一直線に走りながら地獄片をなぎ払っていく。

「こつちだ。」

「お！ハデス！助かる！！」

ハデスはルシファアの先頭に立って走り出す。

「なあ！こいつらなんとかしてくんねーか！！？」

「無理だ、こいつは俺の管轄下じゃない。」

「はあ？じゃあだれだ！？」

「このあたりのモンスターを操ってるのはゼウスだ。」

「まじか！？」

スピードを落とさずに走る。

ほどなくして、タルタロスがある最下層にたどりつく。

「あんまり飛ばされなかったみたいだな。」

ハデスが涼しい顔で立っているのに対し、ルシファーは肩で息をしていた。

「ハアハア・・・さつさと・・・タルタ、ロスみつける・・・かあ・・・あ・・・はあ・・・。」

「お疲れ様。」

パチパチと手を叩きながら男が歩いてくる。

「あ？」

ルシファーは上目使いで男を見る。

「ちっ。」

ハデスが身構える。

「さてハデス、タルタロスはどこかな？」

わざわざユグドラシルから運んでもらって悪いけど、貰い受ける。」
ルシファーは剣をとった。

「ん？」

「やあ、久しぶりだな、ルシファー。」

「ああ、何年ぶりだ？」

「ロキ・・・！」

ロキは不適な笑みをこぼした。

魔王サタン（地獄の決闘編前編）（後書き）

今回は地獄の決闘前編です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1757d/>

エンジェル

2010年10月9日20時22分発行